

「幸いである，見ないで信じる者たちは」ヨハネによる福音書20：24-29の釈義的研究

著者	原口 尚彰
雑誌名	教会と神学
号	50
ページ	27-47
発行年	2010-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024325/

「幸いである、 見ないで信じる者たちは」 ヨハネによる福音書 20：24-29 の 釈義的研究

原 口 尚 彰

はじめに

本論考は、新約聖書中のマカリズム（幸いの宣言）を分析するために行う予備的研究の一つである。ヨハネによる福音書において、マカリズムは後半の2箇所（ヨハ 13：17；20：29）に限定されるが、両方のマカリズムの機能を理解するためには、それぞれが置かれている聖書箇所での正確な釈義的作業が不可欠である。筆者は他の論文において、ヨハ 13：17 のマカリズムが置かれている物語的文脈であるヨハ 13：1-20 の釈義的考察を試みた¹。今回は、ヨハ 20：29 が含まれるペリコペーであるヨハ 20：24-29 の釈義的考察を行う。二つの釈義的考察を通して、マカリズム（幸いの宣言）が第4福音書の中で果たしている文学的・神学的機能を明らかにし、ひいては、ヨハネの神学思想の根幹に迫ることを目指している。

¹ 原口尚彰「知って行う者の幸い：ヨハネ 13：1-20 の釈義的研究」『教会と神学』第49号（2009年）67-101頁。

1. 私 訳

20²⁴ 十二人の一人であるトマスは、ディデュモと呼ばれていたが、イエスがやって来た時に彼らと一緒にいなかった。²⁵他の弟子たちが彼に、「主を見た」と言うとき、彼らに、「その手に釘の痕を見て、釘の痕に指を突っ込み、その脇腹に手を差し込んでみなければ、私は決して信じない」と言った。²⁶八日後に彼らはトマスと一緒に再び室内にいた。戸が閉まっているのにイエスがやって来て、真ん中に立ち、「あなた方に平和があるように」と言った。²⁷次にトマスに、「あなたの指をここに持ってきて、私の手を見なさい。あなたの手を持ってきて私の脇腹に差し込んでみなさい。信じない者になるのではなく、信じる者となりなさい」と言った。²⁸トマスは、「我が主、我が神」と答えた。²⁹しかし、イエスは彼に、「あなたは私を見たから信じたのか？ 幸いである、見ないで信じる者たちは」と言った。

2. 文脈・構成・文学類型

(1) 文脈

この物語は、ヨハネによる福音書全体の結末を構成する一連の復活顕現物語の一つである(ヨハ 20: 1-21: 23)。先行する部分には、週の初めの日の早朝にエルサレム近くで起こった空の墓の物語(20: 1-10)とマグダラのマリアへのキリストの復活顕現の物語(20: 11-18)、さらには、その日の夕方にエルサレムの家で起こった十二弟子への復活顕現の物語(20: 19-23)が描かれている。20: 24-29 は、先の復活顕

現の際にトマスが居合わなかったために行われた十二弟子に対するイエスの再度の復活顕現の物語であり、トマスの不信の克服が主題となっている。直後には福音書全体の結びが置かれ、執筆目的が記されている（20：30-31）。こうした文脈から浮かび上がるのは、この箇所がエルサレムにおける一連のイエスの復活顕現物語のクライマックスとして極めて重要な意味を持っているということである。

（2）構成

20：24-25 復活者の顕現に対するトマスの不信

v. 24 復活者の顕現のときにトマスが不在だったこと

v. 25 トマスの不信の言葉

20：26-29 復活者の再度の顕現とトマス

v. 26 復活者の到来と挨拶の言葉

v. 27 トマスへのイエスの言葉

v. 28 トマスの答え

v. 29 イエスの言葉：幸いの宣言

（3）文学類型

この物語は様式史研究の分類では聖伝 (Legende) に属すると考えられるが、より詳しく言うと、神的存在の顕現物語 (Epiphany Story) である、神的存在の顕現と神の意思の告知を構成要素とする。新約聖書の顕現物語は、イエスやヨハネの受胎告知 (ルカ 1：5-23；1：26-38；マタ 1：18-25)、降誕 (ルカ 2：8-14)、山上の変貌 (マコ 9：2-8 並行)、復活顕現 (マコ 16：1-8；マタ 28：1-8；28：16-20；ルカ 24：1-8；

ヨハ 20：1-18；20：19-23；20：24-29；21：1-23）に見られる。復活顕現物語は顕現物語の一種であり、基本的には復活したキリストが弟子達に顕現する物語であるが、空の墓の物語（マコ 16：1-8）のような、復活者が登場しない例もある。

顕現物語の要素は ① 神的存在の顕現、② 人間の恐れと当惑、③ 告知の言葉、④ 否定的反応、⑤ 保証の言葉である²。ヨハ 20：24-29 の特色は、② 人間の恐れと当惑と ④ 否定的反応がないこと、⑤ 保証の言葉に代えて見ないで信じる者に対する幸いの宣言（20：29）があることである。この復活顕現物語は、復活顕現したイエスが十二弟子の一人であるトマスと行った見ることと信じることに関する教育的対話の性格を持っている。対話を通してイエスはトマスが抱いている死者の復活に対する不信を克服し、信じることは見ることに先行するという原則を知恵文学的なマカリズム（幸いの宣言）の文学形式を用いて宣言している（20：29）。

3. 資料と編集

この部分には並行箇所がない。また、先行する復活顕現物語（20：19-23）の記述を前提にしているので、福音書記者により創作されて挿入されたものであると考えられる³。全体が編集句であるために、この箇

² 原口尚彰『新約聖書釈義入門』教文館、2006 年、123 頁を参照。

³ B. Lindars, *The Gospel of John* (London: Marshall, Morgan & Scott, 1972) 997; R.E. Brown, *The Gospel according to John* (2 vols; AB29-29A; Garden City: Doubleday, 1966-1970) 2. 1031; A. Dauer, "Zur Herkunft der Thomas-Perikope Joh 20, 24-29," in *Biblische Randbemerkungen* (hrsg. v. H. Merkley; FS. R. Schnackenburg, 1974) 56-76; R. Schnackenburg, *Das Johan-*

所には福音書記者の思想や文学的意匠がより直接的に表現されている。尚、トマスについて「十二人の一人」とされているのは、ヨハネによる福音書の中でここだけであることから、R. Bultmann は福音書記者が用いた資料の存在を推定している⁴。しかし、イエスの弟子たちを指して「十二人」と呼ぶ例は 6: 13, 67, 70, 71 に見られるし、イスカリオテのユダを「十二人の一人」と呼ぶ箇所もあるので(6: 71), 「十二人の一人」という句が第四福音書記者の編集に帰する可能性は十分に考えられる。

4. 解 釈

24 節 トマスはここで、イエスの十二弟子の一人とされている。ヨハネによる福音書は、トマスの後に常に「ディデュモと呼ばれていた」という句を付け加えており、トマスという言葉が元々双子(ディデュモ)を意味することを明らかにしている(トマ福音文も同様)⁵。

共観福音書伝承がトマスを十二弟子の一人として名前を挙げるものの(マタ 10: 3; マコ 3: 18; ルカ 6: 15 を参照), トマスに関するエ

nesevangelium (HThKNT 4; 4 Bde; Freiburg: Herder, 1965-1984) 3. 390-391; U. Wilckens, *Das Evangelium nach Johannes* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998) 311; J. Becker, *Das Evangelium nach Johannes* (2. Aufl.; 2 Bde; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1984) 2.626-627; U. Schnelle, *Antidoketische Christologie im Johannesevangelium* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) 156, 159.

⁴ R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* (KEK4; 10. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1941) 537 を参照。

⁵ 「ディデュモ」が双子を意味することについては、Bauer-Aland, 387; 荒井献「トマスによる福音書」講談社学術文庫 1149, 1994 年 32 頁を参照。

ピソードを一切伝えていないのに対して、ヨハネによる福音書では、トマスの発言を度々伝えている（ヨハ 11: 20-25; 14: 5-7; 20: 24-29）。ヨハネによる福音書では、トマスの対話者として性格がより強調されているが、こうした傾向は、外典福音書であるトマス福音書においてさらに強化され、その中に含まれるイエスの語録の大半はトマスに対して語られている。

ヨハネによる福音書によれば、ラザロの死についてのイエスと弟子たちの会話の時に、トマスは弟子たちに、「私たちも行っ一緒に死のう」と言っている（ヨハ 11: 16）。また、告別の説教の時に、トマスはイエスに、「あなたがどこに行かれるのか私たちは分かりません」と述べている（14: 5）。こうした発言を通して浮かび上がってくるトマスの人物像は、イエスに従って行こうとする主観的意思は強く持っているが、先生であるイエスの言葉の真意をまだ十分に理解出来ていない弟子ということであろう。

20: 24 の「イエスがやって来た時に彼らと一緒にいなかった」というトマスに関する注記は、先行する 20: 19-23 節が述べている、復活したイエスが戸を閉めた室内にいた弟子たちに顕れた出来事が起こった時にトマスが何らかの理由で外出しており、その場に居合わせなかったという意味である。

25 節 トマス以外の弟子たちは、トマスが戻って来ると、彼らに対して復活したイエスが顕れた経験を、端的に「主を見た」と語った（20: 18 が伝えるマグダラのマリアの証言も参照）。このことは、先行する 20 節が伝える、「弟子たちは主を見て喜んだ」ということに正確に対応し

ている。他方、復活したイエスの顕現に出会った経験をパウロは、「(キリストが) 顕れた」(I コリ 15: 8) とも、「主を見た」(I コリ 9: 1) とも表現している。これらの表現は、復活者の顕現が視覚的体験として理解されていたことを示している。「その手に釘の痕を見て、釘の痕に指を突っ込み、その脇腹に手を差し込んでみなければ、私は決して信じない」というトマスの発言は、彼がイエスの復活の事実性を疑う姿勢を明らかにしている。十字架に架けられた主の手には釘の痕があり、その脇腹には槍で刺された傷の痕があった(ヨハ 19: 34; 20: 25, 27)。手の釘の痕と脇腹の槍の痕は、復活の主が確かに十字架に架けられた方と同一であり、主が本当に生きていることのしるしとなるからであった(20: 25, 27)⁶。

復活者が十字架に架けられたイエスであることを示すしるしが、復活者の両手に残った釘の痕と脇腹に残る槍傷であることは、20: 20 も前提にしており、復活顕現したイエス自身が弟子たちに示していた(20: 20)。トマスの発言は、復活者の体に残る十字架刑の傷跡を自分の目と指と手で確かめないと、主の復活を信じないという意味である。死者の復活のような超自然的出来事は、実証が必要であり、自分で確認出来ない限り信じることは出来ないという立場である。

新約聖書の時代には死者の復活の可能性を否定する人々が他にも存在した。ユダヤ教のサドカイ派はそもそも死者の復活の可能性を否定していた(マタ 22: 23; マコ 12: 18; ルカ 20: 27; 使 23: 8)。アテネでパウロが対話した哲学者たちは、アレオパゴス演説が死者の内か

⁶ H. Kohler, *Kreuz und Menschenwerdung im Johannesevangelium* (ATH-ANT 72; Zürich: Theologischer Verlag, 1987) 175-176 もこの点を強調する。

らのイエスの復活に言及すると、嘲笑してそれ以上聞こうとしなかった(使 17: 32)。コリントの教会員たちの間にも死者の復活を否定する者たちがあり、パウロが主の復活顕現の伝承の大切さを強調している(1 コリ 15: 1-9)。共観福音書では、ルカによる福音書が、イエスの弟子たちはイエスの復活を俄には信じられなかったもので、復活者は自ら確かに十字架に架けられた方であることを手の釘の痕と脇腹の槍の痕を見せることと、焼いた魚を食べることによって示さなければなかったと述べている(ルカ 24: 11, 37-42)。マタイによる福音書はイエスの弟子たちの間にイエスの復活を信じない者があったことに言及している(マタ 28: 17)。

26 節「八日後に」とは、先行するイエスの復活顕現が起こった週の初めの日(ヨハ 20: 1, 19)を起点にしている⁷。古代の数え方では最初の日も勘定されるので、一週間後の日曜日である。この日も八日前と同様に弟子たちが戸を閉めて室内に籠もっている時に、復活したイエスが入って来ている(20: 19)。復活したイエスは、閉まった戸を通り抜けて部屋に入り、中央に立って、「あなた方に平和があるように」と語った。名詞 εἰρήνη(平和)は、七十人訳においてヘブライ語 שָׁלוֹם の訳として使用されており、「あなた方に平和があるように(εἰρήνη ὑμῖν)」という句は日常生活においてユダヤ人が人と出会った時(士 6: 23; 19: 20; サム上 16: 5; ルカ 10: 5; 24: 36; ヨハ 20:

⁷ 初代教会では、週の初めの日である日曜日には、キリストの復活を覚えて礼拝が守られることになる(1 コリ 16: 2; バル 15: 9)。さらに、一世紀末から二世紀初頭では日曜日が、イエスの死からの復活を記念する「主の日」と呼ばれることになる(黙 1: 10; イグ・マグ 9: 1)。

19, 21, 26), または、別れる時に(王下4:23)用いる慣用句である。名詞 εἰρήνη(平和)は、戦争の反対概念としての国と国の間の平和(ルカ14:32;使12:20),さらには、個人の無事(サム下8:10;11:7),幸福・平安(マコ5:34;ルカ2:29;7:50;8:48)を意味する⁸。復活のキリストが弟子たちに対して語った、「あなた方に平和があるように(εἰρήνη ὑμῖν)」という言葉は(ルカ24:36;ヨハ20:19,21,26),単なる慣用句という範囲を超えて、恐怖の中にあった弟子たちに平和と安心を作り出す力を持っていた。

27 節 復活のキリストは、弟子たちに平和を祈願すると同時に、自分の手の釘の痕と脇腹の槍の痕を示し、トマスに向かって、そこに指と手を入れてみるように勧めた。それはトマスが以前に、「その手に釘の痕を見て、釘の痕に指を突っ込み、その脇腹に手を差し込んでみなければ、私は決して信じない」(ヨハ20:35を参照)と言っていたからである。復活者は、「十字架に架けられた方」として同定されることを求めたのだった⁹。イエスがトマスに検証を勧める理由は、トマスが主の復活を「信じない者になるのではなく、信じる者となる」ためである。

28 節 トマスが主の勧めに従って、復活者の手の釘の痕に指を突っ込み、脇腹の槍の痕に手を差し込んでみたかどうかは、テキストが明示的に述べていないので判断できないが、トマスは復活の主を目の当

⁸ Bauer-Aland, 457-459; V. Hasler, “εἰρήνη,” *EWNT* 2. 964.

⁹ Kohler, 177-179.

たりにして、信じない者から信じる者になったことは事実である。彼は復活者に対して、「我が主、我が神」と答えた。旧約時代では、詩編の中にヤハウェに対して類似の言葉で祈り求める例がある。詩編 35 編の作者はヤハウェに対して、「我が神、我が主よ」と呼び掛けている（詩 35[34]: 23）。さらに、「主よ、我が神よ」という呼び掛けの言葉は、詩 30[29]: 3; 86[85]: 15に見られ、「我が主よ、我が救いの神よ」という句が詩 88[87]: 2 見られる。ヨハネによる福音書において、告別の説教以降、弟子たちはイエスにしばしば「主」と呼び掛けている（ヨハ 13: 6, 9, 13-14, 16, 25, 36-37; 14: 5, 8, 22; 15: 15, 20; 20: 2, 13, 15, 18, 20, 28）。しかし、ヨハネによる福音書において、イエスが神と呼ばれるのは稀で、プロローグの二箇所（1: 1, 18）とこの箇所だけである。プロローグの二箇所（1: 1, 18）は福音書の冒頭でナレーターが読者に語っているが、この箇所では福音書の結びにおいて物語の登場人物の一人が信仰告白の言葉として語っている。トマスは、復活したイエスを神に等しい存在として、「我が神よ」と呼び掛けたのであった。イエスが神と呼ばれるのは、新約聖書全体においても珍しく、ヨハ 1: 1, 18; 20: 28 以外では、テト 2: 13 とヘブ 1: 8 だけである。イエスを神的存在とする立場は、ヤハウェのみを神とする伝統的立場と決定的に相違することになる。ヨハネ共同体に属する信徒たちが、形成されつつあった正統ユダヤ教から異端視され、シナゴグの交わりから追放される原因の一つは、この高いレベルのキリスト論にあった（ヨハ 9: 22; 35; 16: 2）。

尚、周辺世界では、ローマ皇帝のドミティアヌスが、自らを「我らの主であり神（Dominus et Deus noster）」と呼ばせている（スエト

ニウス『皇帝列伝』『ドミティアヌス』13)¹⁰。イエスを「我が神」と呼ぶ立場は、母体のユダヤ教とも、周辺世界を形作るローマ帝国の立場とも相容れない独自の信仰的立場をとることを意味したのである。

29節 イエスは彼に、「あなたは私を見たから信じたのか？ 幸いである、見ないで信じる者たちは」と言った。ヨハ20：29aは、ὅτι ἑώρακάς με πεπίστευκας (あなたは私を見たから信じたのだ) という平叙文とも、ὅτι ἑώρακάς με πεπίστευκας; (あなたは私を見たから信じたのか?) という疑問文とも解される。文法的にはどちらも可能で、解釈者たちの見解は分かれている¹¹。平叙文であれば、トマスが復活のイエスの姿を見て信じるようになったのであると確認することを意味する。疑問文であれば、トマスが信じたことの確認しつつ、見ることによって信じるトマスの信仰の在り方を不十分であるとして批判するニュアンスが付け加わって来る。20：29bは見たから信じることは正反対の原理を，μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες (幸いである、見ないで信じる者たちは) というマカリズムの形で一般的に述べているので、20：29aは見たから信じる立場に疑問を投げ掛ける文章と考える方が自然である¹²。尚、このマカリズムは、対話の相手であるトマス個人だけでなく、信徒一般に妥当する原理であるから、二人称単数

¹⁰ Lindars, 615; Thyen, 769.

¹¹ Barrett, 573; Schneider, 323-324; Schnackenburg, 3.398; Brown, 2.1027; Schnelle, 158; Becker, *Das Evangelium nach Johannes* (hrsg. v. E. Facher; HThK4; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1976) 2.625; Beasley-Murray, 536は平叙文と考え、Bultmann, 539; Lindars, 616; Lagrange, 398; Thyen, 770は疑問文と考えている。

¹² Bultmann, 539を参照。

形で書かれている 20: 29a とは敢えて文体を変えて三人称複数形の形で書かれている。

復活のキリストを見たから信じたのはトマスだけでなく、他の弟子たちも同じである (ヨハ 20: 21, 25)¹³。しかし、トマスは最も先鋭な形で、主を見て、その手の釘の痕に指を突っ込み、脇腹の槍の傷跡に手を入れなければ決して信じないと宣言していた (20: 25)。自分で見て検証しなければ信じないという立場に対して、見ないで信じる者が幸いであると強調する理由は、見ることを求めることが不信を前提にするからであろう。同様に、イエスに対する不信に立って、ユダヤ人民衆はメシアのしるしとしての奇跡を求めるとされている (2: 18; 6: 30)。ヨハネによる福音書において、イエスはしるしを行って神の子の栄光を顕し、多くの人々はそれを見て信じたのであるが (2: 11, 23; 6: 14; 20: 30)、しるしを見ないと信じようとししない態度は厳しく批判する (4: 48)。

尚、グノーシス文書である『ヤコブのアポクリフォン』にも、見ないで信じる者の幸いを語る部分がある¹⁴。ヤコブは復活のキリストから内密に聞いた言葉の一部として、「私を認識した者は幸いである。聞いたのに信じなかった者たちは禍いだ。私を見なかったのに[信じた]者たちは幸いだ」という言葉を伝える (12.8-13.1)¹⁵。他方、この文書

¹³ M.-J. Lagrange, *Évangile selon Saint Jean* (Paris: Gabalda, 1936) 518; Bultmann, 539; L. Morris, *The Gospel according to John* (NICNT; Rev. ed.; Grand Rapids: Eerdmans, 1995) 759 もこのことに注目する。

¹⁴ P. Perkins, "Johannine Traditions in *Ap. Jas.* (NHC I.2)," *JBL* 101 (1982) 411 を参照。

¹⁵ 荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治訳『ナグハマディ文書 III 説教・書簡』岩波書店, 288 頁より引用。

は、「人の子を見た者は禍いだ。幸いなのは、その人を見なかった者たち」という言葉も伝える (3.8-9)¹⁶。正統教会が見ないで信じることも、宣教の言葉を聞いて信じることに力点を置いていたのに対して、グノーシス派は可視的世界そのものを否定的に見ており、見える世界からの解放を説いている。見ないで信じることの幸いは、見ないこと自体の幸いへと徹底され、真の知識(グノーシス)を得ることを通して見える世界を逃れ、見えざる世界に回帰することと表裏一体となるのである¹⁷。

結 論

第4福音書においてマカリズムを語るのはイエスだけであり、他の登場人物はこの文学形式を用いない。この点は、他の登場人物がマリヤや(ルカ1:45; 11:27)イエスに(ルカ1:45)対する讃辞としてマカリズムを語ることがあるルカによる福音書よりも、マカリズムを告げるのがイエスに限られるマタイによる福音書の用例に近い(マタ5:3-12; 11:6; 13:16; 16:17; 24:46を参照)¹⁸。ヨハネによる福音書においてマカリズムが語られる相手は、イエスの弟子たち(ヨハ13:7)、または、弟子の一人であるトマス(20:29)である。このことも、マカリズムが弟子たち全体(マタ5:3-12; 13:16; 24:46)、ま

¹⁶ 同278頁より引用。

¹⁷ H. Kohler, *Kreuz und Menschenwerdung im Johannesevangelium* (ATHANT 72; Zrich: Theologischer Verlag, 1987) 187-190を参照。

¹⁸ 原口尚彰「マタイによる福音書におけるマカリズム(幸いの宣言)」『教会と神学』第47号(2008年)57-95頁を参照。

たは、ペトロ (16: 17) に語られる、マタイによる福音書の場合に類似している。ヨハネによる福音書におけるマカリズムは、マタイによる福音書における場合と同様に、教育的対話の中で示されたイエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強い。

マカリズム (幸いの宣言) の修辭的機能について言えば、特定の状態や態度を幸いと宣言することは、基本的には一定の徳を称賛することを通して共同体の価値観を確認する演示的機能を果たしている (アリストテレス『弁論術』1358b; キケロ『発想論』1.5.7; 『弁論家について』1.6.22; 1.31.141; 偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辭学書』1.2.2; クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.4.1-16)。ヨハネによる福音書の著者は、マカリズムの文学形式によって見ないで信じることを賞賛しながら、原理的な信仰論を提示して福音書物語の結論としているのである¹⁹。

信仰と可視性・不可視性の問題はさらに考察を必要としている。聖書の信仰の対象である神は、天と地の創造者であるが、人間の目には見えない存在である。目に見える世界とその中に存在するものはすべて被造物である (創 1: 1-2: 4a; 詩 8: 4-10; 19: 2-7; 24: 1-2; 136: 4-9)。太陽や月のような天体も被造物であり、神々ではない (知恵 13: 1-9)。天体は神の御手の業として神の栄光を指し示すものと位置付けられる (詩 8: 2-4; 19: 2-5 他)。他方、神殿に安置され人間の礼拝の対象となる神像は人間の制作物であり、神ではない (イザ 40: 18-20; 知恵 13: 10-19; 15: 14-19)。神でないものを礼拝することは

¹⁹ ラビ文献の中にも、しるしを見ないでユダヤ教に入信する回心者の幸いを語るものがある (Str.-B. 2.586 を参照)。

偶像礼拝として厳しく禁止されている（出 20：4-6；申 5：8-10）。

他方、活ける真の神は見えざる方であるが、特別な顕現の出来事を通して形で自己を啓示する場合がある。例えば、出エジプト後の荒野の旅の途上で、イスラエルはシナイ山上に神が降臨した出来事を経験している。神の降臨にあたっては、雲や雷鳴や火や煙といった随伴現象が報告されているが、降臨した神の姿そのものは描かれていない（出 19：9-25；申 5：1-5, 23-25）。ヤハウェはモーセを通して民に語り掛け、その言葉は聞かれ、記されている（出 19：1-7；20：1-17；20：22-23：33；申 5：5-22）。神の顕現の出来事にあっても、神が語る言葉の方に重点があり、神の顕現は言葉の神聖性を引き立てる役割を果たしている。旧約聖書において、神は極めて限られた場合に、罪ある人間の目で神を見ることが許されているに過ぎない。旧約聖書ではシナイ契約の際にイスラエルの民の代表者達は、「神を見て、食べ、また飲んだ」とされる（出 24：9-11）。預言者の一回的召命体験は同時に神に出会い、神を見る見神体験でもあった（イザ 6：1-13；エゼ 1：12-28）。他の場合は神の啓示はより間接的であり、預言者を通して神が言葉を語ることに限定される（イザ 1：2-21；3：16-26；エレ 2：1-37；エズ 7：1-27；ホセ 2：4-25；アモ 1：3-2：16 他多数）。

ヨハネによる福音書は旧約的な創造神に対する信仰に基づき、神は見えない方であり、神を見た者は独り子なる以外はないと述べる（ヨハ 1：18；6：46；1ヨハ 4：20 を参照）。目に見える自然世界や人間社会は、すべて神の創造物である（ヨハ 1：1-5）。ヨハネによる福音書において、神と世界との関わりはより間接的になり、神が世界において直接に自己を啓示することはしないので、人間の世界は神が不在の世

界、神から自立した世界になる危険を内包している。しかし、第4福音書によれば、神は専ら御子イエスの言葉と行いを通して自己を啓示する(1: 18)。啓示者である御子によらなければ、人は神を見ることが、その声を聞くことも出来ない。イエスを神の御子、神から遣わされた者と認識し、受け入れる者には神への通路が開かれているが、受け入れない者は神なき闇の世界に留まるのである(1: 5; 8: 12を参照)。神の独り子イエスは人となり、目に見える世界に可視的存在として身を置き、人間がその栄光を見ることが出来るようになった(ヨハ1: 14)。御子イエスの言葉と業を通して、人々は神の意思を知ることが出来る(3: 31-36; 5: 19-30)。イエスを見た者は間接的な形で神を見たと言えるのである(1: 18; 6: 46; 8: 19; 14: 7, 9)。

ヨハネ福音書が用いる資料の一つであるしるし資料は、奇跡をしるしと呼び、キリストの行うしるしを見ることによって信じることを肯定する(2: 11; 20: 30-31)。福音書記者はしるしに基づく信仰の可能性を否定はしないが、しるしに基づく信仰は十分ではないと考えている。第4福音書において、神の子の栄光を顕すしるしを見て、多くの人々はイエスを信じたのであるが(2: 11, 23; 6: 14; 20: 30), しるしを見なければ信じない地度をイエスは厳しく批判している(4: 48)。しるしは神の子の栄光を指し示すものであり、人々の注意を喚起するものであるが、神の子であることを示す証拠として用いられるべきものではないからである。イエスに対する不信に立って、ユダヤ人民衆の一部はメシアのしるしとしての奇跡を行うことを求めたが、イエスはそのような要求を拒否したのである(2: 18; 6: 30)。

死から甦ったイエスが弟子たちに表れたことは、自然法則を超えた

奇跡的出来事である。復活者の体に残る処刑の際の傷の痕は、復活の主が十字架に架けられて死んだイエスと同一人物であることを示す証拠となっている(ヨハ 19: 34; 20: 25, 27; さらに、ルカ 24: 39-40 を参照)。復活者を見るとは同時に、その体の傷を見てイエスの復活の事実を確信することであった。他方、復活したイエスが弟子たちの前に姿を顕したことは、神的存在の顕現の出来事という意味も持っている。復活者は閉じられた扉をすり抜けて部屋に入ってくる事が出来るし(ヨハ 20: 19, 24)、弟子たちに罪の赦しを宣言する務めや(20: 21-23)、羊を飼う務め(21: 15-19)を与えて世に派遣している。トマスは復活者に向かって、「我が主、我が神」と叫んでいる(20: 28)。しかし、ヨハネによる福音書はこのような直接的見神の体験を無条件で肯定するのではなく、批判的距離を保っている。復活のキリストはトマスに対して、「幸いである、見ないで信じる者たちは」と宣言するのである(20: 29)。

見ることにらずに信じるならば、何によって信じるのかという問題が出て来る。パウロはローマ書において信仰は宣教の言葉を聞くことによるという原則を述べている(ロマ 10: 17)。ルカによる福音書も言葉を聞いてその成就を信じる者の幸いを語っている(ルカ 1: 45)。ヨハネによる福音書も同様に、信仰は言葉を聞くことに起源するという立場に立っている(ヨハ 2: 22; 4: 39-42; 17: 20 を参照)²⁰。復活の主が見える形で姿を現したのはその弟子たちをはじめ最初期の信徒たちに対してだけであって(ヨハ 20: 11-18, 19-23, 24-29; 21: 1-23;

²⁰ Bultmann, 539; G.R. Beasley-Murray, *John* (WBC 36; Waco: Word, 1987) 386; .

I コリ 15: 3-8), イエスの復活・昇天後の時代に生きる信徒たちには、復活の主を見た者はなかった。彼らは必然的に教会の宣教の言葉を聞いて信仰に入る訳であり、主の復活の事実性を「見ないで信じる」立場にあった (I ペト 1: 8 を参照)²¹。見ないで信じることの幸いを説くヨハ 20: 29b の文言は、使徒後時代の信徒であるヨハネ共同体に属する者たちに特に妥当するものであった²²。

参考文献

1. 注解書

Barrett, C.K. *The Gospel according to St. John* (2nd Ed.; London: SPCK, 1978).

Bauer, W. *Das Johannesevangelium* (HKNT 6; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1933).

Beasley-Murray, G.R. *John* (WBC 36; Waco: Word, 1987).

Becker, J. *Das Evangelium nach Johannes* (2. Aufl.; 2 Bde; ÖTKNT 4/1-2; Gütersloh: G. Mohn, 1984).

Bernard, J.H. *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. John* (2 vols; ICC; Edinburgh: T. & T. Clark, 1928).

Boismard, M.É./A. Lamouille. *L'Évangile de Jean* (Paris: Cerf, 1977).

Brodie, T.L. *The Gospel according to John: A Literary and Theological Commentary* (Oxford: Oxford University Press, 1993).

Brown, R.E. *The Gospel according to John* (2 vols; AB29-29A; Garden City: Doubleday, 1966-1970).

²¹ Lindars, 616; Beasley-Murray, 386; Brown, 2.1027, 1049-50; R. Schnackenburg, 3.399; Schnelle, 158-159; Wilckens, 317.

²² W. Bonney, *Caused to Believe* (Leiden: Brill, 2002) 169-171 は、物語批評の観点から、このマカリズムが、登場人物のトマスを越えて、ヨハネ福音書の読者に向けられているとする。

- Bultmann, R. *Das Evangelium des Johannes* (KEK4; 10. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1941).
- Carson, D.A. *The Gospel according to John* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991).
- Dauer, A. "Zur Herkunft der Thomas-Perikope Joh 20,24-29," in *Biblische Randbemerkungen* (hrsg. v. H. Merklein; FS. R. Schnackenburg, 1974) 56-76.
- Delebecque, É. *Évangile de Jean* (Paris: Gabalda, 1987).
- Léon-Dufour, X. *Lecture de l'Évangile selon Jean* (4 vols; Paris: Seuil, 1988-1996).
- Lagrange, M.-J. *Évangile selon Saint Jean* (Paris: Gabalda, 1936).
- Lindars, B. *The Gospel of John* (NCB; London: Oliphants, 1972).
- Macgregor, G.H.C. *The Gospel of John* (Moffat Commentary; London: Hodder & Stoughton, 1928).
- Menoud, P.-H. *L'évangile de Jean* (Neuchâtel: Delachaux & Nestle, 1947).
- Moloney, F.J. *The Gospel of John* (Sacra Pagina 4; Collegeville: Liturgical Press, 1988).
- Morris, L. *The Gospel according to John* (NICNT; Rev. ed.; Grand Rapids: Eerdmans, 1995).
- Neyrey, J.H. *The Gospel of John* (NCBC; Cambridge: Cambridge University Press, 2007).
- 大貫隆『世の光キリスト』講談社, 1984年 (=『ヨハネによる福音書』日本基督教団出版局, 1996年)
- Ridderbos, H. *The Gospel of John* (Grand Rapids: Eerdmans, 1997).
- Schenke, L. *Johannes: Kommentar* (Düsseldorf: Patmos, 1998).
- Shlatter, A. *Der Evangelist Johannes* (Stuttgart: Calwer, 1922).
- Schnackenburg, R. *Das Johannesevangelium* (HThKNT 4; 4 Bde; Freiburg: Herder, 1965-1984).
- Schneider, J. *Das Evangelium nach Johannes* (hrsg. v. E. Facher; HThK4; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1976).
- Schnelle, U. *Das Evangelium des Johannes* (ThHNT 4; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1998).
- Stibbe, M.W. *John. Readings: A New Biblical Commentary* (Sheffield: JSOT, 1993).
- Strathmann, H. *Das Evangelium nach Johannes* (NTD4; Göttingen:

Vandenhoeck & Ruprecht, 1936).

Talbert, C.H. *Reading John: A Literary and Theological Commentary on the Fourth Gospel and the Johannine Epistles* (New York: Crossroad: SPCK, 1992).

Thyen, H. *Das Johannesevangelium* (HbNT 4; Tübingen: J.C.B. Mohr, 2005).

Wengst, K. *Das Johannesevangelium* (2 Bde; ThKNT 4/1-2; Stuttgart: Kohlhammer, 2000-2001).

Wilckens, U. *Das Evangelium nach Johannes* (NTD4; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).

Witherington, B. III. *John's Wisdom: A Commentary on the Fourth Gospel* (Louisville: Westminster—John Knox, 1995).

Zahn, Th. *Das Evangelium nach Johannes* (KNT 4; 6. Aufl.; Leipzig: Deichert, 1921).

2. 諸研究

Bittner, W.J. *Jesu Zeichen im Johannesevangelium. Die Messiaserkenntnis im Johannesevangelium vor ihrem jüdischen Hintergrund* (WUNT 2.26; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1987).

Bonney, W. *Caused to Believe: The Doubting Thomas Story at the Climax of John's Christological Narrative* (Leiden: Brill, 2002).

Dauer, A. "Zur Herkunft der Thomasperikope Joh 20,24-29," in *Biblische Randbemerkungen* (FS. R. Schnackenburg; H. Merkley/J. Lange (Hg.); Würzburg: Echter, 1974) 56-76.

Dodd, C.H. *The Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953).

Fortna, R. *The Gospel of Signs* (Cambridge: University Press, 1970).

——— *The Four Gospels and its Predecessor* (Philadelphia: Fortress, 1988).

Frey, J./U. Schnelle (Hg.). *Kontexte des Johannesevangeliums. Das vierte Evangelium in religions- und traditionsgehistorischer Perspektive* (WUNT 175; Tübingen: J.C.B. Mohr, 2004).

原口尚彰「4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号 (2006 年) 41-68

同「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第 35 号 (2007 年) 48-62 頁

同「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究

- 所紀要』第25号(2007年)33-48頁
- 同「ルカ文書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号(2008年)1-34頁
- 同「Q資料におけるマカリズム(幸いの宣言)」『新約学研究』第36号(2008年)4-15頁
- 同「マタイによる福音書におけるマカリズム(幸いの宣言)」『教会と神学』第47号(2008年)57-95頁
- 同「パウロにおけるマカリズム(幸いの宣言/幸福論)」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第27号(2009年)29-44頁
- 同「知って行かう者の幸い：ヨハネ13：1-20の釈義的研究」『教会と神学』第49号(2009年)67-101頁
- Judge, P.J. "A Note on Jn 20,29," in *The Four Gospels* (3 vols; FS. F. Neyrey; Louvan: Louvain University, Press, 1992) 3.2183-2192.
- Kohler, H. *Kreuz und Menschenwerdung im Johannesevangelium* (ATH-ANT 72; Zürich: Theologischer Verlag, 1987).
- Lee, D.A. "Partnership in Easter Faith: The Role of Mary Magdalene and Thomas in John 20," *JSNT* 58 (1995) 37-49.
- MuBner, F. "Die Fußwaschung (Joh 13,1-17)," *Glaube und Leben* 31 (1938) 25-30.
- Moloney, F.J. *The Gospel of John: Text and Context* (Leiden: Brill, 2005).
- Onuki, T. "Die johanneischen Abschiedreden und die synoptische Tradition," *AJBI* 3 (1977) 157-268.
- 大賀隆「福音書研究と文学社会学」岩波書店, 1991年
- Schnelle, U. *Antidoketische Christologie im Johannesevangelium* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987)
- . "Johannes als Geist-theologe," *NovTest* 40 (1998) 17-31.
- Schwank, B. " 'Selig, die nicht sehen und doch glauben' (20, 19-31)," *Sein und Sendung* 29 (1964) 435-450.
- 土戸清「ヨハネ福音書研究」創文社, 1994年
- Van Belle, G./J.G. van der Watt/P. Maritz. *Theology and Christology in the Fourth Gospel: Essays by the Members of the SNTS Johannine Writings Seminar* (Leuven: Peeters, 2005).
- Wenz, H. "Sehen und Glauben bei Johannes," *TZ* 17 (1961) 17-25.